

スミス再生産論と社会認識 (上)

野 沢 敏 治

1. 課題の設定

『国富論』は、F・ケネーが存命中であるならば、「経済表」のこの製作者に捧げられるはずであった。⁽¹⁾『国富論』初版刊行、1776年3月9日。ケネー没年、1774年12月16日。自己の第二の書を捧げようとしたスミスはケネーからなにをどのようにして学びとったのだろうか。

富とはなにか、豊かさや幸福はどこにあるのか。西ヨーロッパ近代史の一大テーマであり、文明社会の危機意識を反映した富把握の作業に、スミスは参加する。かれは、封建的装いの背後にある近代ブルジョア的再生産構造をケネー「経済表」から読みとり、自分のものに改作した再生産理論をもって根柢から富をつかもうとする。この富把握が再生産論次元で深められ固められるときに、旧帝国主義としての本来的重商主義にたいする批判はもっとも鋭いものになるのである。

スミスは重商主義批判を市民社会の総体認識においてはたそうとする。総体認識は価値論でまず抽象的になされ、ついで再生産論で具体的になされる。ついでというよりか、なされるほかないものである。スミスにあっては、商品の価値規定は資本制社会の構造を把握することへむかわせるものであったし、資本制社会の実質は人間と自然との物質代謝のうえに営まれる社会的物質代謝過程だからである。⁽²⁾社会的物質代謝過程としての再生産論がスミス市民社会認識

原稿受領日 1979年5月28日

(1) J. Rae, *Life of Adam Smith* [1895], With an Introduction by J. Viner. A. M. Kelley, 1977. P. 216.

(2) 本稿は前論稿での『国富論』研究のつづきをなす。「スミス価値論における社会認識の構造」(上)(中)(下), 『商学討究』第28巻第3号・第29巻第1号・同第3号。

なお、最近のスミス価値論研究で注目されるものをつぎにあげる。稲村勲「スミス価値論の論理構造について——第1編第5章・第6章の把握」, 『経済論集』(関西大学)第26巻第2号。公文宏和「剰余価値と資本——資本批判と市民社会批判——」, 『経済科学』第24巻第3号。宮川彰「スミスの「ドグマ」について——「分解」手法の意義とその批判」, 『東京大学経済学研究』第21号。

の母胎となっている。かれはこの再生産論に降りたって西ヨーロッパ史を反省し、旧帝国主義戦争の元凶である重商主義的国富形成を批判した。そしてかれは、再生産論をもつことによって地球的規模での諸国民間の平和な富づくりを展望できた。

経済的富の再生産論視座からする把握、これが本稿の課題である。この課題に答えるためにあらかじめ考えなければならないことがある。それは表象である。表象は理論的認識の方向を枠づけるとともに、理論的認識の深まりによってのみ鮮明に浮きでてくる。表象はその内容が問われることにくわえて、表象それじしんの明証性が問われなければならない。表象は社会認識にとって無縁無用なものだろうか。

まず、スミスの文明社会表象を『国富論』のなかからとりだしてみる。「序論と本書の構想」からのあまりにも周知な次の一節である。狩猟・漁撈の未開社会では全員が労働に従事するけれどもその生活は貧しい。

「これに反し、文明で盛大な諸国民のあいだでは、たとえ人民の多数はまったく労働せず、その多くは働く人々の大部分にくらべて十倍、否ししばしば百倍もの労働生産物を消費するにもかかわらず、社会の全労働の生産物はなおきわめて多いから、すべての人はしばしば潤沢に供給され、最下最貧の階級の職人でさえ、もしかかれが儉約で勤勉なら、どのような野蛮人が獲得しうるよりも多くの生活必需品や便益品の分けまえを享受しうるほどである。」⁽⁶⁾

スミスは文明の高みから異文化民族を野蛮視しているかにみえるが、ここでの問題は叙述の表面にあらわれたかれの未開社会観ではない。文明社会には階級差別と不平等が事実としてある。が、未開社会と対比した文明社会に特徴的なことは、労働者が消費物資をゆたかに享受するということである。労働者は自分を搾取する不労階級とともに、「労働」の産物である消費可能な「労働の

(3) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Ed., by R.H. Campbell and A.S. Skinner. Vol. 1, Clarendon Press, Oxford, 1976.

(以下WNと略す) P. 10. 邦訳はつぎのものを使用する。大内兵衛・松川七郎訳、『諸国民の富』1, 岩波書店, 1969年, 62-63頁。訳文は以前の岩波文庫版よりも改善されているが、本稿ではかならずしも大内訳にしたがわない。

生産物」の分配に参加する。この表象内容は従来のスミス研究史においてなんども指摘されてきた。しかし、疑問が生ずる。スミスのこの表象はごくふつうの常識さえもちあわせているならば自然とおもいうかべられるものだろうか。

「下層階級の人民の境遇のこういう改善は、社会にとって有利だとみなすべきであろうか、それとも不つごうだとみなすべきであろうか？ 一見したところ、答は平明すぎるほど平明であるように思われる。さまざまな種類の使用人、労働者および職人は、あらゆる大きな政治社会の圧倒的大部分を形づくっている。この大部分のものの境遇を改善することが、その全体に対して不つごうだとみなされようはずは断じてない。成員の圧倒的大部分がまずしくもみじめなのに、その社会が隆盛で幸福であるはずは断じてない。そればかりではなく、人民全体を食べさせ、着せ、そして住ませる人々が、自分自身もまたかなり十分に食べたり、着たり、そして住んだりしうるだけの、自分自身の労働の生産物の分けまえにあずかるということは、まったく公正というほかはないのである。」⁽⁴⁾ (傍点は筆者のもの)

労働者の消費水準の向上を社会的に有利で公正だと価値づけるのに、なぜスミスは断定せずに、「一見したところ、答は平明すぎるほど平明であるように思われる」という言いかたをわざわざするのか。考えてみれば、常識的であたりまえにみえることを真にあたりまえにするにはたんなる常識を超えた知の作

- (4) *WN*, Vol. 1, P. 96. 邦訳, I, 178-179頁。ヒュームもスミスとおなじ認識をもつ。「市民のあいだの分配の不釣合があまりにも大きすぎることは、つねに国家を弱めるものである。できることなら各人は、すべての生活必需品と多くの生活便益品とを十分にもつことによって、自分の労働の果実を享受すべきである。だれも疑いえないところだが、このような平等は人間性に最もふさわしいものである……。なるほどイギリス人は、貨幣の豊富の結果だけではなく一部は職人の富裕の結果でもある労働の高価格によって、外国貿易において多少の不利を感じている。しかし、外国貿易は最も重要なことがらではないから、それは幾百万という人々の幸福と競合させられるべきではない。そして、たとえかれらがそのもとで生活しているあの自由な政体にもはや愛着を感じさせるものがないとしても、この大多数の幸福がありさえすればそれで十分であろう。」(David Hume, *Essays Moral, Political and Literary* [1741-1742], O.U.P. 1963, PP. 271-272. 田中敏弘訳『ヒューム経済論集』東京大学出版会, 1967年, 24-25頁) スミスはそのおなじ認識を再生産論の構築においてはたす。これがヒュームとことなる点である。

業を必要とするのではないだろうか。さらに先取りしていえば、スミスの表象は、実は、科学的に再生産されてはじめて平明になるのではないだろうか。理論認識が表象を現像させる。この仮説をわたしは本稿で確かめてみようとおもう。

それにしてもスミスじしん認めているように、かれの富表象はその時代のもではなかった。重商主義学説と常識が教えるように、富は多額の貨幣を所有することにあるということのほうが平明な事実とされていた。また、はじめは富を消費可能な物資にみていた者でも議論のすすむうちに重商主義的富観に陥ってしまうことをスミスはみていた⁽⁵⁾。なにが重商主義的富批判を最後までつらぬかせるのか。さらに注意すべきことは、表象のなかに登場する労働者は個人的消費物資のみを生産している。当然のことだが、スミスの労働者とても生産手段を生産するはずであり、生産手段の生産なくしては消費財の生産はできない。スミスは事実としてはそのことを知っている。では、なぜ、スミスの表象のなかの労働者は非常識にも（！）消費財のみを生産するのか。かれの表象内容には常識では理解できないことがふくまれている。

勤労する労働者大衆のゆたかな消費という文明社会表象、労働こそすべてであり生産は消費のためにあるというマキシム⁽⁷⁾、これらは再生産論にまで市民社

(5) 「わたしは、たとえ冗漫にながれるおそれはあっても、富とは貨幣または金銀だといふこの通俗的な見解をあますところなく検討することが必要だ、と考えたのである。すでに述べたように、貨幣は、日常用語ではしばしば富を意味しており、そしてこういう表現上のあいまいさが、この通俗的な見解をわれわれにとってひじょうに親しみぶかいものにするのであって、その結果、この見解が不条理だということを確信している人々でさえ、ややもすると自分たちの原理を忘れてしまい、自分たちの推理をすすめてゆくうちに、それは証明するまでもなく確定的で否定しがたい真理だ、と思ひこんでしまうようになりがちなのである。商業に関するイングランドの最優秀な著述家たちのなかのある人々は、一国の富はその金銀だけではなくて、その土地、家屋およびありとあらゆる消費財でもある、と述べながら発足する。ところが、かれらの推理をすすめてゆくうちに、土地、家屋および消費財はいつのまにか忘れられてしまうように思われるのであって、かれらの議論の調子からいうと、いっさいの富は金銀であり、これらの金属を増殖するのが、国民の工業や商業の大目的だ、と想定していることがしばしばある。」(WN, Vol. 1, PP. 449-450; 邦訳, 1, 672-673頁)

(6) 機械・道具等の生産手段そのものの生産が一生産部門として成立している。第1篇第1章分業論で叙述されているところをみよ。

会の経済学的分析をすすめるときに明証性を獲得する。表象と格率を社会認識のための道しるべとし、「労働」と「労働の生産物」の概念を再生産論においてかためなおすことが必要である。表象を理論認識の土台のうえに発生する現実的な社会描写であるとかつむならば、このことと関連して、理論的には荒唐無稽視されてきた生活感情や生活信条はある根拠のもとでは積極的な意味をもつことがわかる。生活感情や生活信条は深い根拠があって発生するものであり、諸個人の頭と胸に反映した社会関係である。意識と感情を社会科学にとって意味あるものとし、それらの根拠を探究するならば、スミスの理論上の難点を克服する道が開かれるだろう。再生産論次元で解決されるべき主要な理論的難点は次のものである。流動資本と固定資本の分類基準、「 $v+m$ 」ドグマと構成価格論、生産的労働概念における第2規定の意義、投下労働と支配労働との関連、生産的労働者としての役畜と自然、等々。これらの諸論点解明のなかで現象叙述と本質把握との内的かかわりが納得されるだろう。

以下、スミス再生産論の骨組を再構成してかれの「経済表」ともいうべきものを発掘してみたい。⁽⁶⁾

- (7) 「あらゆる人が自分自身の労働という形で所有する財産こそ、他のいっさいの財産の本源的な基礎なのであるから、それはもっとも神聖で不可侵なものである。」(WN, Vol. 1, P. 138. 邦訳, I, 245頁)

「消費は、いっさいの生産の唯一の目標であり、目的なのであって、生産者の利益は、それが消費者の利益を促進するのに必要なかぎりにおいてのみ顧慮されるべきものである。この命題は完全に自明であって、わざわざ証明しようとするのもおかしきくらいである。ところが、重商主義体系においては、消費者の利益はほとんど終始一貫して生産者のその犠牲にされているのであって、この体系は、消費ではなくて生産こそ、いっさいの工業や商業の究極の目標であり、対象である、と考えているように思われるのである。」(WN, Vol. 2, P. 660. 邦訳, II, 973頁)

- (8) この課題をまえにしておもしろいおこされることは高島善哉と内田義彦のスミス研究である。高島は旧日本帝国の戦時体制下において『経済社会学の根本問題——経済社会学者としてのスミスとリスト——』を著し、経済社会学という方法ののっとってスミス市民社会を生産・流通・分配・再生産の総過程において把握し、その総過程を生産力の体系と命名した。内田は第二次大戦後の日本経済再建のなかで『経済学の生誕』を著し、古典経済学を社会体制認識の科学として意義づけ、生産資本循環範式をもって重商主義国家に対決するスミスの理論基準とした。

われわれは以上のスミス研究にくわえて、ケネー研究とマルクス研究から多くを学んでさらに前進すべきである。平田清明『経済科学の創造』(岩波書店, 1965年), 同氏『経済学と歴史認識』(岩波書店, 1971年)

2. 先行的蓄積論が示唆するもの

『国富論』第2篇は再生産過程を対象としている。その第2篇序論で始源的に問題とされているのがいわゆる先行的蓄積論である。先行的蓄積は資本制的蓄積にたんに時間的に先行するものではなく、また、それは独立生産者の産業資本家への移行のみを問題とするのでもない。それは後論の再生産過程把握への序という性格をあたえられている。

分業による労働生産力の発展は自己消費以上の多量の財貨を生産する。分業担当者は一面的労働にたずさわるから、かれの多面的欲望は自己消費以上の財貨を商品としてそれを他人の自己消費以上の財貨と交換することによって満たされる。領有と消費が商品交換を媒介としてなされる「商業社会」。

「いったん分業が徹底して導入されると、ある一人の人間の労働の生産物は、かれのそのときどきの欲望のきわめて小さな部分を充足しうるにすぎない。その圧倒的大部分は、かれが自分自身の生産物で、またはこれと同じことであるが、その生産物の価格で購買する他の人々の労働の生産物によって充足される。⁽⁹⁾

ところで社会内分業が現実のものになるためには分業主体に資財が蓄積されていなければならない。商業社会の叙述につづけてスミスは言う。

「けれども、この購買は、かれ自身の労働の生産物が完成されるだけではなく、売られてしまってからでなければおこなえるはずがない。それゆえ、すくなくともこういう二つのことがともに成就されるときまでかれを扶養し、かれにその仕事の材料や道具類を供給するにたりるさまざまな種類の財貨の貯えがどこかに貯えられていなければならない。織工が自分の特殊の業務に専念できるのは、自分の織物が完成されるだけではなく、売られてしまうまでのあいだ、自分を扶養し、その仕事の材料や道具類を供給するにたりる資財が、自分の所有としてであれどか他の人のそれとしてであれ、あらかじめどこかに貯えられているばあいだけである。明らかにこの蓄積は、かれがひじょうに長い

(9) WN, Vol. 1, P. 276. 邦訳, I, 445頁。

あいだこういう特殊の業務に自分の勤労を充用するのに先だっておこなわれていなければならないのである。⁽¹⁰⁾

先行的蓄積の主体に問屋制前貸資本家らしきものが紛れこんでいるが、スミスが念頭においた主体は独立生産者である。独立生産者の勤労と節約による先行的蓄積によって最初の資本が形成され、そのあとに資本制的生産がつづく。

「勤労ではなく、節約が資本増加の直接の原因である。なるほど、勤労は、節約が蓄積する対象物を調達する。けれども、勤労がたとえどのようなものを獲得しようとも、節約がそれを貯蓄し貯蔵しないなら、資本はけって増大しないであろう。⁽¹¹⁾

「織工または靴屋のような独立の職人が、自分自身の仕事のための原料を購入したり、その所産が売りさばけるまで自分を扶養したりするのにたりるよりも多くの資財を獲得したばあいには、かれはこの剰余で自然に一人またはそれ以上の日雇職人を雇用する。それはかれらの仕事によって利潤をあげるためである。この剰余が増加すれば、かれは自然に自分の日雇職人の数を増加させるであろう。⁽¹²⁾

スミスには独立生産者から資本家への自然的移行のみがあって、近代的プロレタリアートの歴史的誕生を問う本源的蓄積論はない。だがいったん本源的資本の支配下にはいった労働者は賃労働者である。本源的資本の形成以降にスミスが対象とする市民社会は、別人格となった資本家と労働者によって構成される。それゆえつぎのようになる。勤労と節約による先行的蓄積と本源的資本(余剰資財)の形成… $P \cdots W' - G' \left\{ \begin{array}{l} G - W < \frac{A}{P} m \\ g - w \end{array} \right.$ 。ここに、先行的蓄積論が本来いかなる理論視座において問題とされるべきかが示唆されている。

第一に、先行的蓄積物の素材は生産資本形態をとっている。「材料」material, 「道具」tool, 「生活資料」maintenance または「食料品」provisions。材料

(10) *WN*, Vol. 1, PP. 276-277. 邦訳, I, 445-446頁。

(11) *WN*, Vol. 1, P. 337. 邦訳, I, 532頁。第2篇第3章資本蓄積論からの引用だが内容は先行的蓄積である。

(12) *WN*, Vol. 1, P. 86. 邦訳, I, 165頁。

は人間労働によって加工変形される素材であり、道具は人間労働が素材に働きかけるさいの文字どおりの労働手段である。疑問になるのは、労働力ではない生活資料が他の生産資本項目とならんで掲げられていることである。また、それは労働者によってのみならず資本家によっても消費されるものとして先行的蓄積物にふくめられていることである。そして全体として疑問になることは、材料・道具・生活資料という生産資本の分類基準が不明なことである。価値増加の視点からの不変資本・可変資本の区別ではないし、生産物への価値移転の様式からみた固定資本・流動資本の区別でもない。ここでは以上の疑問呈示のみをしておくが、とにかくも先行的蓄積物は生産資本形態においてつかまれている。

第二に、先行的蓄積物は生産資本形態から流通資本形態に転換することが暗示されている。先行的蓄積物は $P \dots W' - G' \left\{ \begin{array}{l} A \rightarrow G - W \\ G \rightarrow W(A) \\ G - w \end{array} \right.$ という生産と流通をふくむ長期間にわたって消費される本源的資本だからである。

第三に、本源的資本はすくなくとも一回転期間に十分な量であるから、また、生産は一回かぎりではないから、本源的資本形成は再生産と関連していることが読みとれる。逆に、生産過程のそもそもの端初においてのみならず、第2・第3・第4…と後続する再生産過程のどの端初においても資本制的蓄積は資本家には先行的蓄積と意識されるのではないかと予想される。

以上から、先行的蓄積論が再生産論と関連するものであることがわかる。この点を確認させる序論の記述は以下のとおりである。資本制社会では社会内分業はむしろマニユ内分業における労働生産力の発展の結果であり、⁽¹³⁾ そのマニユ内分業の条件が先行的資本蓄積である。

「資財の蓄積は事物の性質上分業に先だたざるをえないから、労働もまた、

(13) スミスはピン・マニユファクチャにおける分業の効果をしめしたあとにつづけてつぎのように言っていた。「分業の効果は、他のあらゆる技術や製造業においても、このきわめて零細な製造業と同様である、といっても、その多くのものは、労働をこれほど多数に細分することも、また作業をこれほどはなはだしく単純化することもできない。にもかかわらず、分業は、それが導入されるかぎり、あらゆる技術における労働の生産諸力を比例的に増進させる。さまざまな職業や仕事があつたがいに分化するもの、この利益の結果として生じたもののように思われる。」(WN, Vol. 1, P. 15. 邦訳, I, 70頁)

先だっておこなわれる資財の蓄積だけに比例してますます細分されるのである。同数の人々が完成しうる材料の量は、労働が細分されるようになればなるほど、ますます大きな割合で増加し、また各職人の作業がしだいにますます単純化されればされるほど、こういう作業を促進したり短縮したりするためのさまざまな新しい機械が発明されるようになる。したがって、分業が前進するにつれ、等数の職人に恒常的な仕事をあたえるためには、従来と等量の食料品の貯えと、より未開の状態において必要とされたであろうよりも多くの材料や道具類の貯えとが、あらかじめ蓄積されていなければならない。⁽¹⁴⁾

分業が導入されれば、以前と同数の労働者が雇傭されるばあいでも労働生産力は飛躍的に増大し、加工されるべき材料と加工のための道具は量的に増大する。はじめから高度化した資本構成をもつ先行的蓄積！ このことからうかがわれることは、資本制的蓄積がすすんだある極点をもって、それが再生産の各年度当初とそもそもの創業とに必要な先行的蓄積の内容にされていることである。資本制的蓄積過程内での、剰余価値の追加的生産手段形態をとった資本への転化、これが再生産過程の、しかも拡大再生産過程の始源にくみこまれる。さらに、最初の労働維持元本は労働者に「恒常的な仕事」constant employment をあたえるのに予定されたものだから、この点からも先行的蓄積が再生論的内容をもつことがわかる。以上の意味での先行的蓄積を人格化したものがスミスの資本家である。

「資財の蓄積は労働の生産諸力のこういう大改善をおこなうためにあらかじめ必要であるから、この蓄積は自然にこういう改善を先導することになる。労働を維持するために自分の資財を使用する人は、必然的に、できるだけ多量の所産を生産するようなしかたでそれを使用したがる。したがって、かれは職人たちのあいだに仕事をもっとも適切に配分されるように努力すると同時に、自分が発明するなり購買するなりしうる最優秀の機械類をかれらにあてがってやるように努力する。この双方の点についてのかれの能力は、一般にかれの資財の大きさ、またはこの資財が雇傭しうる人々の数に比例する。したがって、勤

(14) WN, Vol. 1, P. 277. 邦訳, 1, 446頁。

労の量は、あらゆる国で、それを雇傭する資財の増加とともに増加するだけでなく、この増加の結果として、同量の勤労がはるかに多量の所産を生産するのである。⁽¹⁵⁾」

ここで言われる「できるだけ多量の所産を生産する」とは、相対的剰余価値としての追加価値の生産である。それが社会的にいかなる物的形態をとるかは後論の再生産論で生かされる問題である。

さいごに先行的蓄積論で注目されることはスミスの歴史観である。かれは先行的蓄積以前の「未開社会」をつぎのように描く。

「分業がなく、交換もめったにおこなわれず、あらゆる人が独力であらゆるものを調達するという社会の未開状態においては、その社会の業務をおこなうために、資財があらかじめ蓄積されたり、貯えられたりする必要はまったくない。あらゆる人は、そのときどきの欲望を自分自身の勤労によってそのつど充足しようと努力する。空腹になれば、かれは狩りをしに森へ行くし、自分の上衣が着古されれば、自分が殺した最初の大きな動物の皮を身にまとうし、自分の小屋がこわれかかれば、もっとも手ぢかなところにある木や芝草でできるだけじょうずにそれを修理する。⁽¹⁶⁾」

18世紀の啓蒙思想家スミスは西ヨーロッパ文明社会を経済学的に自己認識するために未開社会を認識対象とする。生産資本も消費物資もみな自然の倉庫にたくわえられている。自然は人間に無償で先行的蓄積資財をあたえる。分業を知らないこの楽園では勤労も節儉も必要ではない。先行的蓄積を前提とする分業をまったく必要としない未開社会では、個々人は素手で自然にたちむかい、自給自足する。スミスにあっては、分業を人類が知ったあとから本来の文明史がはじまるのである。⁽¹⁷⁾

第2篇序論からの考察をまとめてみよう。先行的蓄積とは再生産のためのストックの蓄積であり、再生産社会としての文明社会を未開社会から分かつ行為である。独立職人がその先行的蓄積を最初におこなう人格である。

(15) WN, Vol. 1, P. 277. 邦訳, I, 446-447頁。

(16) WN, Vol. 1, P. 276. 邦訳, I, 445頁。

3. 個別的資財の分析

『国富論』第2篇の基本テーマは社会的再生産過程の構造把握にある。従来の第2篇研究は生産的労働概念のせまい字義解釈から解放されて社会的再生産過程の視座からとらえなおされるべきである。また、一見して無味乾燥にみえ、従来ほとんどその固有の意義を無視されてきた資本分類論は社会的再生産過程把握にはいる導入部としておさえる必要がある。そして、資本投下順序論の母胎には社会的再生産過程把握があることを理解する必要がある。まず、以下の本論を資財分類論からはじめる。

一般に分類は分類の基礎となる基準視角があつてのみなされる。スミス資財分類論（せまくは資本分類論）の基準視角はなにか。

スミスは個別部門的な先行的蓄積資財を再生産視座から分析する。

「ある人が」自分を数カ月間または数年間扶養するにたりる資財を所有するばあいには、当然かれはその大部分から収入をひきだそうと努力し、自分の直接の消費のためには、この収入がはいって来はじめるまで自分を扶養しうるだけのものを留保しておくのである。それゆえ、かれの全資財は、二つの部分に区別される。すなわち、かれが自分にこの収入をもたらしてくれるものと期待する部分は、かれの資本とよばれる。他の部分は、かれの直接の消費を充足するものであって、それは、第一に、かれの全資財のなかで本来この目的のために留保された部分か、または第二に、どのような源泉からひきだされるにせよ、しだいにはいって来るかれの収入か、あるいは第三に、それ以前の年に

(1) 第1篇での未開社会では分業と商品交換が共同体内部で萌芽的に発生していた。第1篇は資本制社会における剰余価値の生産と追加価値の分配とを本来の考察対象とするから、その資本制社会の構造を論理対比的に明確にするために資本制社会の前段階に未開社会が設定される。未開社会には社会内分業と単純流通が存在する。だが第2篇の未開社会には分業は存在しない。第2篇は社会内分業の前提であるマニュ内分業と資本蓄積を考察対象とするから、資財の先行的蓄積を前提とするマニュ内分業をもたない未開社会では分業は存在しないとうつる。

未開社会の仮構設定を文明的な資本制社会分析の基準と理解しているのは富塚良三である。同氏、『蓄積論研究』未来社、1965年、101-103頁。なお、「高貴な未開人」 noble savage と文明社会批判との関連、「野蛮な未開人」 ignoble savage と発展段階論的社会理論との関連についてつぎのものが参照されるべきである。J.D. パナール著・鏡目恭夫訳、『歴史における科学』Ⅳ、みすず書房、1967年、第12章「歴史における社会科学」。R. L. Meek, *Social Science and The Ignoble Savage*, C. U. P. 1976.

以上の二つのいずれかによって購買され、しかもまだ全部的には消費されぬもの、たとえば衣服、家具およびこれに類するようなものの貯えか、そのいずれかである。人々がふつう自分自身の直接の消費のために留保する資財は、これらの三つの項目のいずれか一つまたはその全部なのである。⁽¹⁸⁾

収入とは年々規則的にその源泉をそこなうことなしに入ってくるもの、文字どおりの「再び来るもの」revenue⁽¹⁹⁾である。この意味での収入を所有者にもたらず資財が資本である。くりかえし生産資本を機能させる結果として利潤を獲得する資本家は、資本を、利潤収入の源泉だと主観的に「期待する」。再生産視座からの所得と資本の規定は、収入をもたらない資財の分析にも適用されている。このことを以下においてみてみよう。

個別的な先行的蓄積総資財はつぎのように分類される。

- | | | |
|-----------|---|------------------|
| 先行的蓄積総資財 | { | a 直接自己消費資財 |
| | | (i) 本源的自己消費資財 |
| | | (ii) 収入 |
| | | (iii) 消費未完済の消費資財 |
| | | b 資本 |
| | | (i) 流動資本 |
| (ii) 固定資本 | | |

a 直接自己消費資財

一見して (ii) と (iii) が先行的資財の項目をなすのは奇妙である。まず (i) から順次、分析にはいる。

(i) 本源的自己消費資財は資本家の手に第1回目の収入がはいってくるまでの期間かれを扶養する。資本家は「この収入 [—第1回目の利潤収入] がはいって来はじめるまで自分を扶養しうるだけのものを留保しておく」。資本

(18) *WN*, Vol. 1, P. 279. 邦訳, 1, 448頁。[] は筆者のもの。以下同様。

(19) 当時の辞典からもこのことがたしかめられる。Cf., M. Postlethwayt, *The Universal Dictionary of Trade and Commerce*. The third edition, London, 1766, Vol. II. S. Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755) Vol. II. Georg Olms, 1968. (rep.)

家は価値的には利潤と等価のものを自分自身に前払いすると虚構されている。資本家は第1回目の生産過程でうみだされる剰余価値と同額のものを創業時に前払いする。先行的蓄積の総資財は再生産過程における創業資本の位置にたつ。

(ii) ここでの収入は資本の第1回目の生産過程終了以降「しだいにはいつて来る」。先行的総資財のうちの資本を源泉として第1年度末以降から継続的にはいつてくる収入、それが直接自己消費資財の項目に年々繰り入れられる。年々の利潤収入が全体的には先行的蓄積の一部分を構成することからみて、利潤は創業時点においても第2回目以降の生産開始時点においても前払いされるとみなされている。

(iii) 消費未完済の消費資財は(i)(ii)のいずれかによって購買されたものだから、第1年度または第2年度以降のものである。(iii)は価値的には(i)(ii)に解消されるにもかかわらず独自項目とされるのはなぜか。第3年度の位置にたてば明瞭になることだが、衣服・家具の耐久的消費財は第3年度より前の年に購買されて第3年度においてなお消費中であり、第4年度以降においても消費可能である。スミスはまるで、長期の耐用期間をもつ固定資本の回転から消費財を考察しているかのようだ。すると、食料品は流動資本に類比されることになる。

(i)(ii)(iii)の分析からつぎのことがいえる。スミスは、(ii)を時間の基準にすれば、過去(i)→現在(ii)→未来(iii)の流れのなかで消費資財を把握している。また、利潤は収入として消費項目に年々繰り入れられるから、消費資財は単純再生産のなかで考察されている。おなじく資本も再生産視座から考察されていると予想がつくであろう。

b 資本

スミスの対象は生産資本である。かれは生産資本の分類を農業にのみでなく工業にまで拡張して一般的なものにする。商業にまで生産資本の分類を適用させるゆきすぎをしているけれども。かれは商業と工業の国イギリスの経済学者として、農業国フランスの経済学者ケネーの資本分類論をかれなりに翻訳している。そしてそのうえで再生産把握をしている。スミスはケネーに比較すれば

回転循環視角からの資本分類論を強固に保持することができず、この点で、再生産把握におけるケネーからの理論的後退がある。が、スミスにはかれなりの巨大で堅固な再生産把握がある。かれの叙述の微細にわけいってそのことを垣間見てみる。

スミスは利潤獲得の仕方のちがいによって資本を流動資本と固定資本に分類する。（この分類は社会的給資本のばあいにも適用される。）

（i）「流動資本」circulating capital

「それは財貨を産出し、製造し、または購買し、さらに利潤をえて再販売するのに使用されうる。このように使用される資本は、それがその使用者の所有にとどまるか、または同一形態にとどまるかのいずれかするあいだは、その使用者になんの収入または利潤ももたらさない。」⁽²⁰⁾

（ii）「固定資本」fixed capital

「それは主人を変えることなしに、つまりもうそれ以上流通することなしに、収入または利潤をもたらすような諸物に使用されるのである。」⁽²¹⁾

スミスは生産資本を分類するにさいして資本価値の移転・流通・回収様式の差異という基準をとらずに、生産資本を流通資本と混同させているようにみえる。この混同は、しかしながら、スミスの資本制の生産把握にとって積極的の意味をもっている。かれは資本を資本価値の形態変換において動的につかもうとし、資本循環内での資本の位置をもって分類の指標とする。この点、分析が必要である。

（i）流動資本の分析

不断の進行形にあって運動を完了させない状態の資本、文字どおり「流通しつつある資本」。

(20) WN, Vol. 1, P. 279. 邦訳, I, 449頁。「産出」は raise の訳語だが、大内訳では「調達」とされている。この大内訳は正確ではない。竹内謙二は raise の内容をぬきだして「農産物を作り」と訳している。鋭い翻訳である。大河内一男監修による玉野井芳郎訳もこの竹内訳をとりいれている。参照。竹内謙二訳、『アダム・スミス国富論』（上）、東京大学出版会、1969年、347頁。大河内一男監訳、『アダム・スミス国富論』（I）、中央公論社、1970年、424頁。

(21) WN, Vol. 1, P. 279. 邦訳, I, 449頁。

流動資本はまず「財貨を産出し製造する」ために使用されるから、農業と工業で使用される生産資本である。この生産資本をスミスは商人資本の眼をもって流通資本形態において観察する。流動資本は「購買しさらに利潤をえて再販売するのに使用される。」生産資本を流通資本として観察することが資本把握するうえでどんな意義をもつか。商人資本の運動は $G-W-G'$ である。スミスはその運動を無限のくりかえしとしておさえる。「その使用者の所有にとどま」らず、「同一形態にとどま」らず、不断に「主人を変え」て「流通する」資本が流動資本である。それはある経済的形態をとつてもその形態に骨化することのない非固定的資本であり、不断にその経済的形態を変換する。スミスは形態変換からいかにして利潤が生ずるかを説明していないが、資本を「流通」circulation という不断の形態変換の相対動的につかむことに成功している。⁽²²⁾ このことをおしすすめれば、産業資本の運動は $G-W \cdots P \cdots W'-G'$ の循環であるから、資本は不断に貨幣・生産要素・商品となってその形態をとりかえるはずである。このような資本把握をするうえで経験に訴えることのできる例が商人資本である。

② 流動資本規定から資本の運動的本性を積極的にとりだしたのは中期マルクスである。

「資本はいまや、それがあるときは貨幣として、あるときは商品として、あるときは交換価値として、あるときは使用価値として現れる諸契機のどの点においても、こうした形態変換のうちに自己を形式的に維持する価値としてばかりでなく、自己を増殖する価値として、価値としての自己自身に關係する価値として措定されている。ある契機から他の契機への移行は特殊な過程として現れるが、これらの過程はそのどれもが他の過程への移行である。したがって資本は、いずれの契機においても資本であるところの過程しつつある価値として措定されている。こうして資本は、流通する資本 (Capital Circulant) として、すなわちいずれの契機においても資本であり、ある規定から他の規定に循環しつつある (kreislaufend) 《ところの資本として》措定されている。復帰点は同時に出発点であり、またその反対である——すなわち資本家。資本はすべて、もともと流通する資本であり、流通の生産物 (Product) であるが、また流通を生産するもの (produzierend)、それ自身の軌道として流通を描くものでもある。」(傍点は原文での隔字体) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, (1857-1858), Dietz Verlag, 1953, S. 435. 高木幸二郎監訳、『経済学批判要綱』, 第3分冊, 大月書店, 1961年, 473頁。参照されるべき研究文献はつぎのものである。山田鋭夫, 「『経済学批判要綱』における流動資本と固定資本」(上)(下), 『経済科学』第15巻第3号・第16巻第1号。

「商人の財貨は、かれがそれを貨幣とひきかえに売るまでは、かれになんの収入ももたらさないし、またこの貨幣にしても、それがふたたび財貨と交換されるまでは、石と同様かれになんの収入ももたらさない。かれの資本は、つねにある一つの形態でかれの手をはなれ、別の形態でかれの手に帰って来るのであって、それがかれにある利潤をもたらしうるのは、もっぱらこのような流動、つまり継続的交換によってである。それゆえ、このような資本は、きわめて適切に流動資本とよぶことができよう。⁽²³⁾」

スミスは資本を運動的にとらえている。もしも、以前より増加した価値が流通からひきあげられて自立した姿をとるならば、その蓄蔵貨幣は資本ではなくなる。資本でなくなるばかりか、流通への関連を可能性としても実際的にも断ちきるならば、それはおよそ貨幣でもない。それはたんなる自然物質、金銀である。蓄蔵貨幣が資本になるためには、貨幣は流通との関連をとりもどして再び商品に形態変換し、 $G-W \cdot W-G$ の形態変換運動をつづけなければならない。スミスが例示する商人資本の運動は、過程的価値としての資本を特徴的に表示する。

流通資本ばかりでなく生産資本も形態変換する。スミスは明示していないが、農業での種は穀物に、工業での材料は加工品にと、生産要素は労働生産物に実体変換する。資本制的生産の基礎の上では、物質的実体変換は生産資本→商品資本という経済的形態変換において遂行される。

実体的・経済的形態変換として資本をおさえることは、社会的再生産過程としてのスミス市民社会を発掘する第一歩である。

(23) *WN*, Vol. 1, P. 279. 邦訳, I, 449頁。

(24) 「惟うに王国の資産においても私人の財産においても事情は同じである。商品の貯へを有っている私人は、だからと言って、自分の貨幣を輸出したり若しくは、それで貿易をしたりしないとは言わないのみでなく（かく言うは滑稽の至りである）、又之を商品に換え、以て彼らの貨幣を増加し、こうして一のものに他のものに絶えず規則正しく換えることにより富裕となる。そして彼らの欲する場合には彼らの全財産を財宝に換える。何となれば商品を有っている者は貨幣に事欠かないからである。」*T. Mun, England's Treasure by Foreign Trade* (1664), Macmillan and co., New York, 1910. PP. 22-23. 張漢裕訳、『外国貿易によるイギリスの財宝』岩波書店、1942年、42-43頁。

スミスの産業資本家は貨幣・生産要素・商品の不断の形態変換運動のなかに生きるから、とうぜんその頭には重商主義的な利潤表象が再生産される。資本は貨幣または商品の形態で表象され、利潤は流通から生ずるとみなされる。スミスにはいわば重商主義的偏向がある。ただし、それは、重商主義にはない再生産論のうえにたって産みだされるものである。⁽²⁴⁾

(ii) 固定資本の分析

形態変換の運動を停止した資本、非流動的で文字どおり「固定化された資本」。

資本の一面が経済的形態変換の運動として知的にとらえられるとすれば、他の一面は物として感性的にとらえられる。それは生産資本の素材形態に固定化されている。

「それは土地の改良に使用されうるし、有用な機械や職業上の用具の購買にも使用されうる、いいかえれば、それは主人を変えることなしに、つまりもうそれ以上流通することなしに、収入または利潤をもたらすような諸物に使用されうるのである。それゆえ、このような資本は、きわめて適切に固定資本とよぶことができよう。」⁽²⁵⁾

土地改良・機械・用具等の労働手段は、生産部門に設置されるとそこから出ることのできない物である。もっともそれらはある人の生産資本になるまえは他の人の商品資本であつたはずだから、それらは一度は所有者を変えたスミスの流動資本であるといふことができる。このかぎりでのみ土地改良・機械・用具は地主と産業資本家によって購入されうる流通資本形態をとる。ただし、所有者じしんが改良した土地と所有者じしんが発明した機械・用具は一回も流通することなく直接生産にはいる。とにかくも、「もうそれ以上流通することなしに」生産部門にとどまる資本は固定資本である。機械はいかにして完成生産物に物的に移転しうるか！毛織物にその原料である羊毛をみつかることはできて、その労働手段である織機を跡づけることはできない。

(25) *WN*, Vol. 1, P. 279. 邦訳, I, 449頁。

スミスは使用価値視点から固定資本を規定する。生産過程で物的姿態を変えることなく消耗しつくされるまで機能する労働手段、これがスミスの固定資本である。さきの流動資本のばあいとは対照的に、利潤は生産過程に設置される物から生ずるように資本家には表象される。「収入または利潤をもたらしような諸物」としての固定資本。

さて、スミスの資本分類論は以上につきない。以上を応用し補足する内容が、そして後論の社会的総資本分類論と社会的再生産過程研究にいきる内容が、叙述されている。それは、部門別の個別資本内部における流動資本・固定資本の比率についてである。

はじめに商業部門。

「商人の資本は全部が流動資本である。かれの店舗または倉庫を機械や職業上の用具とみなさぬかぎり、かれはこういうものを必要としない。」⁽²⁶⁾

商品も店舗・倉庫も生産資本ではないが、形態変換をする商品は流動資本、形態変換をしない店舗・倉庫は固定資本とみなされる。

つぎに工業部門。

ここで本来の流動資本が登場する。

「あらゆる親方工匠また製造業者の資本の若干部分は、かれの職業上の用具に固定されなければならない。とはいえ、この部分は、ある職業ではきわめて小さく、他の職業ではきわめて大きい。裁縫職の親方は、一包の縫い針のほかには職業上の用具を必要としない。靴屋の親方の用具は、ごくわずかではあるがそれよりやや高価である。織工の用具となると、靴屋のそれよりものはるかに高価である。けれども、このようなすべての親方工匠たちの資本のはるかに大きい部分は、かれらの職人たちの賃銀か、またはかれらの材料の価格かのいずれかとして流通し、その所産の価格によって利潤とともに払いもどされるのである。

「他の諸事業では、はるかに大きな固定資本が必要とされる。たとえば、大製鉄所のばあいには、鉍石を熔解するための熔鉍炉にしても、塊鉄炉にして

(26) WN, Vol. 1, P. 280. 邦訳, I, 449頁。

も、截鉄機にしても、いずれも巨額の経費なしには建設できない事業上の用具である。……⁽²⁷⁾」

「職人たちの賃金」と「材料の価格」は貨幣形態をとっているが生産資本のなかの流動資本である。ただし、流動資本は生産過程で生産物に全部的に価値移転し、流通過程では全部的に価値流通・回収されるという規定が明記されていない。スミスの流動資本規定を制約するものは資本の形態変換を「流通」とみるかれの観点である。この観点からみた産業資本の運動は $G-W < \frac{A}{P_m} (P \dots) W' - G'$ となる。つまり、 $G-W \cdot W' - G'$ 、 $G-W-G'$ である。

なお、スミスは言及していないが、生産面に固定されなければならないのは固定資本価値のみではない。流動資本価値も生産資本としては材料と労働力に固定されてそれらの所有者のもとにとどまらなければ、生産は不可能である。購入した羊毛の転売や、資本家による他の織工との契約のむすびなおしだけでは、毛織物は生産されないし産業利潤も獲得できない。生産資本価値は流動資本にも固定されねばならない。

さいごに農業部門。

対象は農業資本家の投下資本である。

「農業者の資本といっても、農業用具に使用される部分は固定資本であり、かれの労働使用人たちの賃銀や生活維持費に使用される部分は流動資本である。かれは、前者を自分自身の所有として手もとにおくことによって利潤をあげ、また後者を手ばなすことによって利潤をあげる。^②かれの役畜の価格または価値は、営農用具のそれと同じように固定資本であり、役畜の維持費は、労働使用人のそれと同じように流動資本である。農業者は、役畜を手もとにおくことによって利潤をあげ、またその維持費を手ばなすことによって利潤をあげる。^③使役するためではなくて販売するために、買いいれられたり肥育されたりする家畜の価格や維持費は、いずれも流動資本である。農業者は、これらを手ばなすことによって自分の利潤をあげる。^④ある種畜地方で、使役するためはな

(27) WN, Vol. 1, P. 280. 邦訳, 1, 450頁。

く、販売するためでもなく、ただその羊毛やミルクや幼畜によって利潤をあげるために買いいれられる羊群や牛群は、固定資本である。利潤は、それらを手もとにおくことによってあげられる。それらの維持費は流動資本である。利潤はこの流動資本を手ばなすことによってあげられるのであって、この資本は、維持費自体の利潤と、家畜の全価格に対する利潤との双方をともない、羊毛、ミルクおよび幼畜の価格という形でもどってくるのである。種子の全価値もまた、適切に言えば固定資本である。なるほどそれは、土地と穀倉とのあいだを行ったり来たりするけれども、けっして主人を変えはしないし、したがってまた適切に言えば流通もしない。農業者がかれの利潤をあげるのは、その販売によってではなく、その増殖によってである。⁽²⁸⁾

①はこれまでのスミスの流動・固定分類のくりかえしである。後論との関連で留意すべきことは、農業労働者を「労働する家畜」labouring cattle とおなじく「労働する使用人」labouring servant とみることであり、賃金を有形固定資本の機能維持に必要な「維持費」maintenance に類似させていることである。

②はこれまでの流動・固定分類にくわえて、生産物にたいする価値交付のしかたのちがいによる分類という、再生産論にとって重要なことを暗示している。

牛・馬の役畜は農夫とおなじく働く。また、働くためには生きていなければならない。役畜が生きて機能するためには飼料が必要である。飼料費は労働者の生活手段費用に相当し、営農用具の維持修繕費・部品取替費に相当する。それは役畜の賃金である。⁽²⁹⁾ある農業資本家は他の農業資本家から商品作物である

(28) WN, Vol. 1, PP. 280-281. 邦訳, I, 450-451頁。

(29) 「役馬」labouring horse という表現は第1篇第6章11・パラグラフにある。第1篇第10章第2節24・パラグラフをも参照されたい。

(30) 「どのような社会でも、あらゆる商品の価格は、けっきょくこれらの三部分のいずれか一つに、またはそのすべてに分解されるのであって、あらゆる進歩した社会では、この三つのすべてが圧倒的の大部分の商品の価格のなかに、その構成部分として多かれすくなかれはいりこんでいるのである。

たとえば、穀物価格においては、一部分は地主の地代を支払い、別の部分はその生産に雇用された労働者や役畜の賃銀または維持費を支払い、さらに第三の部分は農業者の利潤を支払う。これらの三部分は、直接的にか究極的にかのいずれにせよ、全穀物価格を形づくっているように思われる。」(WN, Vol. 1, P. 68. 邦訳, I, 136頁)

飼料を年々購入し、飼料費を年々手ばなすことによって利潤を獲得する。年々の投資としてのこの流動資本にたいして、役畜本体は多年的に使用される固定資本であり、役畜購入費は期間損益計算のために年々減価償却される固定資本費用である。役畜には耐用年数があるから、その消耗時点で農業生産継続に必要な新たな役畜を補填するときにそなえて、その耐用期間にわたって農産物価格から年々一定の償却費が積立てられねばならない。この減価償却費は役畜更新の時がくるまでは農業資本家から手ばなされてはならない。

役畜の購入価値はその耐用期間中は生産過程に一部でもとどまるが、役畜の飼料費は年々農業資本家の手をはなれて流動する。ケネーの原前払・年前払概念のスミスの改作がここにみられる。

なお、ここではスミスは、個別農業資本の立場から農産物価格に不変資本価値がふくまれることを事実上みている。資本制的商品価格 = 不変資本価値(c) + 可変資本価値(v) + 剰余価値(m)。このことの確認は社会的再生産過程把握との関連で重要である。⁽³¹⁾

③は生産を形態変換の観点からとらえようとするスミスをはっきりしめしている。

ここでの家畜は労働手段用として生産される役畜または食肉用家畜であり、農業資本家は牧畜資本家である。牧畜資本家は幼畜を購入してそれに飼料をあたえ、監督や肥育の労働をくわえて肥育家畜とし、それを商品として流通に投げ入れる。このばあいの幼畜と飼料は完成生産物である肥育家畜からみれば原料であろう。原料は流動資本である。幼畜と飼料に投下される価値は生産資本→商品資本→価値実現という形態変換運動のなかにあるから、それはスミスの流動資本である。この流動資本としての資本運動のなかで生活する牧畜資本家は利潤を自然と譲渡利潤的に表象するだろう。

④での分析対象は役畜でも食肉用家畜でもない別の畜産品である。その畜産

(31) 個別部門次元でのいわゆる「第四の部分」である。穀物価格の構成要素には、地代・賃金・利潤のほかに、「第四の部分」が、農業者の資財を回収するために、またその役畜その他の営農用具の消耗を補償するために必要だ。(WN, Vol. 1, P. 68. 邦訳, 1, 136頁)

品とは家畜本体から派生する羊毛・ミルク・幼畜である。家畜本体が母体となって羊毛・ミルク・幼畜が生産される。穀物を生産する土地に類似されうるのがこの家畜本体である。また、良質で多量の羊毛・ミルク・幼畜を得るために本体の品種改良をすることは土地改良に類似されうる。だからスミスにとって、家畜本体に投下された資本は固定資本である。本体から派生するもののみが商品となり、形態変換する。本体を維持するための飼料費はまえに考察したように年々投資的な流動資本である。

注意すべきは後半の一文である。資本一利潤の生活信条の枠内ではあるが、個別牧畜資本家の立場から、飼料費という流動的不変資本価値が羊毛・ミルク・幼畜の価格を構成すると語られている。

⑤の種子=固定資本観がわれわれに語りだす内容はなんであろうか。

収穫のあとで土地から出てきた穀物は、自己消費用穀物と販売用穀物とをのぞけば、次の穀物生産のための原料になる。原料用穀物としての種子は、商品資本形態をとって流通せず、それが出てきたところと同じ生産部に直接はいりこんで生産手段となる。それはなんの経済的形態変換をすることなく穀倉に収納され、翌年度に同一人物の手によって土地にまかれる。種子=固定資本の規定がしめすことは、ある生産手段は再生産過程において同一生産部面を出入りするということである。翌年度の穀物生産のための種子が当年度の生産物のなかから物的に補填されるということが、このばあいのスミスの固定資本の内容である。

それにしても種子は原料であるから流動資本に分類されるべきではないだろうか。なお残るこの疑問を解けてがかりは、「種子の全価値もまた適切にいえば固定資本である」（傍点は筆者のもの）と言って、④の論理の延長上で規定していることにある。だから、家畜本体が羊毛・ミルク・幼畜を生みだすのとおなじく、種子は穀物増殖の本体である。この増殖本体に投下された資本はこれもまたスミスの固定資本だと言うことができよう。種子は原料というよりは、このばあい土地になぞらえられるべき生産手段であろう。

小括

資財の内容解析からいえることは、先行的蓄積は再生産過程把握にむかう出発点であり、歴史は再生産としての資本制社会の経済理論的把握をもって未開から文明へと整序されていることである。また、スミスの流動資本は形態変換運動の視角からとらえられた生産資本であり、固定資本は生産過程に固定された物的生産資本である。それゆえ、スミス資本分類論の背後によこたわる事態は、生産と流通の循環的世界である。

以上の認識をもって社会的総資財の分類と社会的再生産過程把握の問題にはいる。スミスがめざす理論把握の本来の対象は、個別的諸資本が有機的に関連しあう社会的再生産過程にあり、国富にある。